

牛店
雜談

安愚樂鍋

假名垣魯文

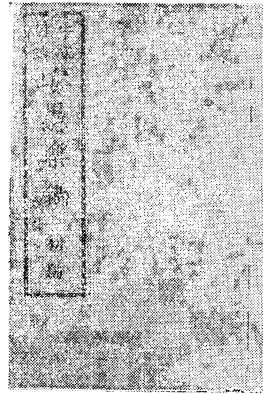
牛店
雜談

安愚樂鍋

(一名
二名
奴

論

建)



(原本初編表紙)

安愚樂文著

牛店
雜談
安愚樂鍋初編

東京

誠之堂梓

(一名 初編定)



(原本初編扉)

牛店
雜談

安愚樂鍋 初編

東京市隠 假名垣魯文戲著

初編自序

世界各國の諺に。佛蘭西の着倒れ。英吉利の食たふれと。食事に並べて諧と。衣は肌を覆ふの器。食は命を繋ぐの鎖。心の猿の意馬止て。咲いた櫻の花より團子。色則是食色氣より。餐氣を前の往味肉食。牛にひかれて膳好方便。佛徒家の五戒さらんバア。虚と實の内外を西洋風味にま混て。世に克熟し甘口とは。作者が例の目己味時。家言もあしの不果放行。彼小便の十八町。慢々地急案即席調理。刻急の五分ほども透ぬ測量のタレ挨拶。牛肉の替りは後軒にして。一帙端を採給へ

と。文明開化開店。告條めかして演述に
なん。

明治四 歳辛未 卯月初の五日東
京本石街 萬安閣の隠居に於て
牛の煉染黒牡丹の製主

假名垣魯文題

標目從初編至貳編

- 西洋好の聴取
 - 陷落個の原語
 - 郎武士の獨金
 - 野郎間の詔言
 - 諸工人の俠言
 - 生文人の會談
 - 商個の胸會計
 - 藍醫の不養生
 - 文盲の無茶論
 - 半可の浮世談
 - 人車の引力言
 - 語家の樂屋落
- 是に洩れたるは副編に著すべし

開場

天地は萬物の父母。人は萬物の靈。故ゆるに
五穀草木鳥獸魚肉。是が食となるは自然の理
にして。これを食べふこと人の性なり。昔々

の里謔に。盲文爺のたぬき汁。因果應報穢
を淨むる。かち／＼山の切火打。あら玉うさ
ぎも吸物で。味噌をしめこの喰初に。そろ／＼
開化し西洋料理。その功能も深見草。牡丹紅
葉の季をきはらず。猪よりさきへだら／＼歩
行。よし遅くとも怠らず。往來絶ざる淺草通
行。御藏前に定鋪の。名も高旗の牛肉鍋
十八よれば十種の註文。昨晚もたたる味噌を
舉。たれをきかせる朝歸り。生のかはりの粹
がり連中。西洋書生漢學者流。劉訓に似た儒
者あれば。宵柏めかす僧もあり。土農工商
老若男女。賢愚貧陋おしなべて。牛鍋食は
ねば開化不進奴と鳥なき郷の蝙蝠傘。蔦合
羽の翅をひろげて遠からん者は人力車。近く
は錢湯歸。藥吮。牛乳。乾酪。チーズ。乳油。洋名
牛陽はことに勇潔。彼肉陣の兵糧と。土産
に買ふも最多き。人の出入の賑はしく込合の
節前後御用捨。御懷中御用心。銚子のお
かはり。お會計。お歸なさい入ラッしや
い。實に流行は晝夜を捨て繁昌斯の如くに
なん。されば牛はうしづれの同氣もとむる肉
食群衆席を區別しありさまを。一個々々に
穿て云はい。こつてつとしたところか

○西洋好の聴取

▲今年は三十四度男のうさや女はシヤシヤあきあきゆつかに
かゝるで見てゐるやうなうさやあたまはなでけかきよつかに
でもなるところ、百日このかたはつしたるを右のつかひなでつやよく
のわはくテコリといへる番水やうさやののみちゆきぶのたう糸二た子
のたいたはがきさうの下た着うさやのわはくしのかつたうさやの
いにてともめたる種神計のやまのめえりからはづしてきんぐさんだ
い力かなんではあるからうさやはかたはらへおきくといふさうだ
を見るのておとどき見えつゝははかにうさやを見かけたりとくには
かをし「モシあなたエ牛は至極高味でござす此肉
がひらけちやアばたんや紅葉はくへやせんこん
な清潔なものをなぜいままで喰はなかつたので
ござせん西洋では千六百二十三年前から専ら
喰ふやうになりやしたがそのまへは牛や羊はそ
の國の王が全權と云つて家老のやうな人でなけ
りやア平人の口へは這入やせんのだと我國も
文明開化と號つてひらけてきやしたから我々ま
でが喰ふやうになつたのは實にありがたいわけ
でござそれを未だに野蠻の弊習と云つておひら
けねえ奴等が肉食をすりやア神佛へ手が合され
ねえのやレ穢れるのとわからねえ野暮をいふの
は究理學を辨へねえからのことでござそんな
愚すに福澤の著た肉食の説でも讀せてえモシ西
洋にやアそんなことはござせんござせんござせんを
ふくせあり彼土はすべて理でおして行國がらだか
に蒸氣の船や車のしかけなんざアおそれい



(原本初編口絵)





(畫插し取聴の好洋西(本原))

たもんだね既ににござうじろ傳信機(でんしんき)の針(はり)の先で新聞紙(しんぶんし)の銅板(どうばん)を彫(う)たり風船(ふうせん)で空(そら)から風をもつてくる工風(くふう)は妙(めう)ちやアござせんかあれはネモシ斯(か)いふ譯(わけ)でござえス地球(ちきゅう)の圖(ず)の中に暖帶(だんたい)と書(か)てありやす國(くに)があるがネ彼所(かのこ)が赤道(えきだう)といッて日(ひ)の照(て)りの近(き)イ土地(ちど)だからあつてことはたまらねえそこで以(も)てテ國(くに)の人(ひと)が日(ひ)にやけて皆(みな)なくろん坊(ぼく)サそれだからその國(くに)の王(わう)がいろ／＼工風(くふう)をして風船(ふうせん)といふものを造(つく)ッて大きな圓(まる)い袋(ふくろ)の中(うち)へ風(かぜ)をはらませて空(そら)からおろすとそのふくろの口(くち)をひらきやすネ。すると大きなふくろへ一ぱいはいらませてきた風(かぜ)だから四(よ)はう八方(はつぱう)へひろがッて國(くに)の内(うち)がすゞしくなるといふ工風(くふう)でござえまだ奇妙(きせう)なこととがありやす魯西亞(ろしや)なンぞといふ極寒(ごくかん)い國(くに)へゆく寒中(かんちゆう)は勿論(もちろん)夏(なつ)でも雪(ゆき)が降(ふ)ッたり氷(こおり)が張(は)るのて往來(かうらい)ができやせんそこで彼蒸氣車(そくわきくるま)といふもの工風(くふう)しやしたが感心(かんしん)なものサネ一體蒸氣車(いったいそくわきくるま)

と云(い)ふものは地獄(じごく)の火(か)の車(くるま)から考(かんが)へたのださうだが大勢(おほいせ)をくるまへのせて車(くるま)の下(した)へ火筒(かきん)をつけてそのなかで石炭(せきたん)をどん／＼焚(た)からくるまの上(うへ)に乗(の)てゐる大勢(おほいせ)は寒氣(かんき)をわすれて遠道(えんどう)の通行(たうこう)ができやせうナント考(かんが)へたものサネ。何(なん)サこのくれえな工風(くふう)は彼土(かのち)の徒(ども)はちやぶ／＼前(まえ)でげス此(こ)の大千(だいせん)世界の形(かたち)象(さう)せえ渾沌(こんとん)として毯(きん)の如(ごと)しと考(かんが)へたわサ。その以前(いぜん)は釋迦(しやくぢあ)如來(にょらい)が須彌山(すみせん)と號(なづ)けたところが西洋人(せいようじん)はまん／＼たる海上(かいじやう)を渡(わた)ッて世界(せかい)の果(は)からしてまでを見(み)きはめたのだから釋迦(しやくぢあ)坊(ぼく)も後悔(こうかい)したさうサそこで以(も)て海(うみ)をわたる工風(くふう)を西洋(せいよう)ちやア後悔(こうかい)術(じゆつ)といひやすわナオヤモウ御歸路(ごきりく)かハイさやうならオイ／＼ねえさん生(なま)で一合(いっごう)。惹(ひ)も一處(いっしょ)にたのむ／＼

○墮落(だらく)個(こ)の廓話(かくわ)

▲年は二十四五(にじゅうご)のうなまじろくあたまのかみはたぐんにていてふに着(き)はだめし女の物(もの)をなほしたたりとおもひはれ二三日(ふたにっぴつ)でぐでんたはこいれすたすこしやべれを見(み)せるたちなりきんぐり十六(じゅうろく)だばはこいれしやうのあやしきにしんどやきよしんぐりはりのほせるはつてはさうげのやとみふたにこれし仕(し)れものともえたりとてきくつておまぐりつておまぐりのやをかな具(ぐ)をひけるかしつれとふたりまし「半(はん)ちやんゆらべの世界(せかい)はおいらはじつにふさいだよ彼樓(かのう)へは三四(さんよ)たび登樓(とうろう)したことのあるのだからけんのだといふのに竹坊(たけぼう)がむやみにあがらうといふからおめえは一伴(いっばん)の處(ところ)へ脱走(だつそう)してし

まふしおいら一人(ひとり)ほかへあがるのもおもしろくなえから野面(のづめ)であがりこんだところがあいにくと二會(ふたかい)までいつた遊女(よめ)がおいらに出(で)つくはせたらうちやアねえかこいつは不見識(ふけんしき)だとおもつたけれどひきつけのときごまかしてわきを向(む)いてゐたからお茶屋(ちやや)が氣(き)をきかして「はいおめししかへトはやく切(き)りあげたのでその場(ば)はきりぬけたが番(ばん)新め(しんめ)がおいらの顔(かほ)を見(み)おぼえてゐやアがつて。ひけて座(ざ)しきへ還(かへ)入(い)るとすぐにモシユぬしやアよききなました人がわるウざんすヨこれサお茶屋(ちやや)の人(ひと)このきやくじんは後の月(ごのつき)の三日(みっか)に田町(たまち)の辨(はん)天(てん)平(へい)野(や)から三人(さんにん)一座(いざ)で二會(ふたかい)に來(き)なましたお客(きやく)ですヨト辭(こと)にこゑをかけられたからうしろを見(み)せるのも外聞(がいぶん)がわるいとおもつたが馴染(なじみ)金(かね)數(かず)財(さい)にやア代(か)れねえこれをきくがいなや小便(せうべん)にいつて。その歸(かへ)り足(あし)にはしごをト／＼。はきものヲトみづからこゑをかけて茶屋(ちやや)の女(をんな)を。おきざりまいねんさツサとござれやといふ身(み)で飛出(とで)して茶屋(ちやや)まですた／＼歸(かへ)つたところが女中(にようぢゆう)が後(あと)から追(お)ッかけて來(き)てなにかお氣(き)にさはつたことでもございましたかは。エ、コウ。いゝちやアねえか。ダガノおいらのやうに年(とし)びやく年中(ねんぢゆう)吉原(きちげん)へ計(はか)りはひりこんでゐちやアかほがわるくなつてきさがこはがつて相手(あひだ)にしねえから島



(畫插の!話座の個落墮!本原)

ばらへでも巢をかへようとおもつてゐるのサな
 んだつても丸三年といふもの一トばんもかゝし
 たことがあるめえちやアねえかそれだから寶槌
 樓のことばの『かうなんしあゝなんし』から鶴
 泉の『くされてゐる』だしきつてゐる『平泉ち
 やア客を古風にぬしといひサ』なんだます『ち
 れつてえ』といふことから松田屋のつ字こと
 ば。角えびのはやことに岡本の『くるわヨ』『ゆ
 くわヨ』金瓶大黒ぢやア『あゝやだよ』といふこ
 とばを禁じられたシ尾彦の朝のむかひのはやい
 のヤ大文字屋の氣のかるいの。伊勢六の大見識
 の内ゆるみまでを知つて居るシ。岡田屋のおい
 らんたちは傾城水滸傳の種本で甲子屋のしん造
 衆が客のくるかこねえかを茶屋に念をおすこと
 までしようちしちやア樂屋が見どほしで客に
 なつてもおもしろいあそびはできねえからずつ
 と世界を見やぶつて新造買もして見たが次の間

あそびはがうせい氣ほねのをれるものだしいま
 の壯年サにあんまり老人じみるからそれも廢し
 て藝者と出かけたが組で八十奴はつづかねえ。
 うら茶屋ばひりの汐待もたいぎだからグツト色
 氣を去つて幫間を買つてあそんでも見たが彼
 奴等はどうも友を呼でならねえヨ此あひだも新
 孝をさそつて金子ヘ夕飯を喰ひに行とあとから
 喜代壽に正孝序作露八なんぞといふ流行ツ子
 がどか〜とおしこんで來てかけがへのねえ大
 格幣をとろ〜一枚こすらせられたぜモウ〜
 なかはごめん〜。しかし今夜は廊の名残に。
 彼一件の處へ出かけるつもりだが。もうひとば
 ん附合ふべしサなに又株ダ。イヤサ實にこんや
 で根ツきり葉ツ切りほんとうにこれぎり〜扱
 おてうしもおつもありダ

○鄙武士の獨盃

▲としこは三十ばかりいろあぐまてくろくあたまは自ひのくすた
 ぼんかなつとつとの子に火のつぎさうなみだれがみくるみかき一
 のぞんでまくりしてしんべにかまへ上はとまひがまはりし自文でわり
 手びをうしろをならたきなとすとどろにて。詩衣は骨にい
 たりイそではア腕にいたるウ腰間秋水。鐵を斷
 べしイ。人觸れば人を斬。馬ふるれば馬をきる
 ウ。十八交をむすぶ健兒の社ア引。是ヤ〜



(繪画!孟蘭の士武鄙!本原)

女子酒ニてもこずかい。こや〜そして牛生の
 和味のをいま一皿くれンカ。ア、愉快ぢや〜
 トあたりをきよ〜みまはしてとなりてゐたる。ハア失敬ご
 むらひをじろ〜見りくつしたるをたてなはし。
 めんコヤ女子なにを因循してをるか勉強して
 神速にせい。いひながら又ちの。君牛肉に至極御好
 物とするさつものウ仕るが僕なぞも誠賞味い
 たすでござるイヤかゝる物價沸騰の時勢に及ン
 で割烹店などへまかりこすなんちふ義は所謂激
 發の徒でござる此牛肉チフ物は高味極まるのみ
 ならず開化滋養の食料でござるテ。イヤ何か
 とまをして失敬。御めんコヤ〜女子一寸來ン
 かコヤ。あのうナ生肉をナ一斤ばかり持参いた
 ンで。至極の正味を周旋いたてくれイア、
 酌酌きはまツたオ、生肉かえゝわ〜會計は
 なんぼかじん〜愉快きはまる陣屋の酒えん中
 にますら雄美少年引。トはなをさげたけはつづみを〜しき
 け〜女子またくるぞらからおもてへたちいで。ウタ〜しき



(本原「人生文藝談」挿畫)

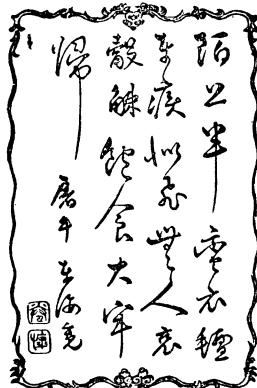
なむか万八あたりの會つれと見えつればさそひてつれゆきたる人物とみえたりもつともなりくうけこたへりとしるべし「ア、けふの會はよわつた〜あのやうに唐紙扇面の攻道具でとりまかれてはさすがの僕もがつかりだこれだから近頃ほどのやうにまねかれても謝儀ばかりもたせて書畫會へは出ぬことときめたがけふは南溪老人が喜壽の筵といひ殊に南湖翁の三十三回の追福ちやから先生が出て玉はらなければ枕山松塘蘆洲雪江東寧帆雨柳園臨庵桂洲波山の諸先生たちが不承知ちやからぜひに出席をねがふとわざ／＼扇めん亭の善公と廣小路の一庭が使者に來たので止を不得出かけたところが肴札五枚がけの一局へ合併して一杯のむが否やどうか先生おあとでねがひますと左右から扇面の鎧ぶすまさせてうるさいことだとギョツとしたがかねて期したことであ、是も會主への義理ちやと觀念して書畫の注文でも扇面が貳百疋唐紙なら五百疋と極札が

ついてある腕を一言の禮のみで先四五本かゝせられたと思ひなさい僕がからたの居まはり雲霞のごとく取巻てお後で一本どうか諸先生の合作でござりますから一寸ねがひますのヤレ遠國からたのまれました書畫帖だのとたちまち扇紙の山をなしたは實にうるさいはやく切あげて脱しようとし身じんまくをしてゐる最中隣の方で生醉がけんくわをはじめた騒ぎで人々が奔走する間に早々下タへ來ると膳所に琴雅乙彦などいふ風流雄が肉食をきめてゐるむかうの隅には諏訪町の松本がエ何サ楓湖先生がサ藝者の房八を合手に大なまゐひでこれから船で上手へ出かけるから是非附合とこまらせるので爰にも足をとめることがならんそれは偶の附合だから止を得ぬが明日は大藩の知事公から召されてお席に於て新地三輪對の山水を即席にしたゝめんければならんからチトつきあひははづすちやが後日として尊公のそでをひいてぬけ出したがなにか吞たらんやうちやによつて牛店ときめたは中村のかまびすきところより落つてのめるから妙だてナ扱まづ春木氏の義理もすんだがエ、また來月の朔日は萬八で虚堂の展覽會二日がカウト寺島の梅隣亭で席書の約束ア、うるさい／＼實に高名家には誰がしたモウ／＼名聞は廢すべ

し廢すべしオット、ゝゝ、こぼれる／＼

牛店 雜談
安愚樂鍋 貳編上

東京市隱 假名垣魯文戲作



(原本貳編上題字)

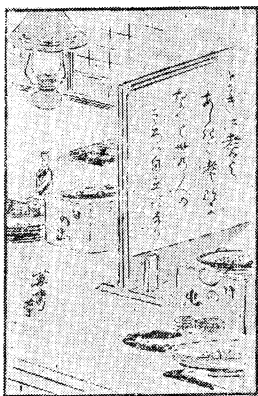
二編換序

喘を問ふ宰相もあらず、羊にかへる王者もなし、大牢の滋味、煮焼て一鍋三百銅、角をぬかれ皮を晒され膽を乾さる、各國と交際は、汝を殺すが爲ならず、魯酒淡うして邯鄲圍る、更に災を移されたるを哀れむ、嗚呼天平時乎。

芬兮成字題

西洋料理通談

鴨の脛の短きも。鵝の脛の長きも。割煮の法を得。鹽梅の術を盡さば。豈憂ひ悲むことあらん哉。情惟るに。莊周が鵞立。伊尹が會席は。板前の清く。俎箸の直にして。然も陰らぬ庖丁なれども。七五三代の古風に傾き。八珍九獻の當世に協はず。今哉外國の珍客。交際の佳宴をひらき。互市に盡す饗應も。萬里製を異にして。飲食の設け等類からず。然れども佳味の佳味たるは彼我同一なり。傳聞。我邦未開闢さるとき。渾沌たる鶏の卵を。蛋黃わろしとして食せざるも。盛運星霜を経て進。清の露は羹汁となり。濁れる穀は肉種とな



(原本貳編上口繪)

り。山海の珍味咄嗟に辨じ。精飯咽に煩く。美食口に飽て遠く西洋の佳味を遙遙に彼土の調理を學ぶ。善隣の徳大なる哉。偉なる哉。されば馬乗を畜ふ者も。鵝豚を屠り。伐氷の家にも牛羊を畜ひ。鶏を割に牛刀を用ひ。鵝を食うて吐出さず。時勢に従ふ新奇の膳部。この機に乗じて調ふときは。肉箸に。菜魚の泰山も崩すべく。食匙に。汁の蒼海をも量つべし。嗚呼萬物開化の時は。萬情互に通ずるの術。此料理通。三卷の天地人に籠れりとせん歟。依て後に一口を拈して。以て跋に換ると云爾。

明治新熟北門社之食客

假名垣魯文漫題

傳染病の新聞に。賣弘めたる牛肉の。功能もむなしくならんかと。牛肉鋪の主人角を折り。肉を減しちからを落し。林涅爾字斯土を病たる如く。豫防て手術もなかりしに。他國は知らず掛幕も。あやに畏き。我邦は。八百萬神達と。親類一家のよしみあれば。忽地例の神風に。吹はらうたる肺天白日。再び盛る牛店の繁昌。別て此頃吉原と新島原の立退に物いふ花の花川戸。賑ふ人



(原本貳編上口繪)



(原本貳編上口繪)



(畫圖食肉密の妓婦日本原)

ころか幾分のさんだんもできやアしないわネし
かしあの人も肌合なしやうばいをしてゐるから
さだめしかほづくにもかゝはるだらうしまんざ
らくめんができないといつてやつたらはたらし
のない女郎だといえをつかさねるのはしれき
つてゐるからじれつたくつて小の町さんにさう
だんをするとあの人のいふにやアおいらんエち
やうどいゝきれめだからできないといつてこと
わつておしまひなんし年もいかないわちきの口
からしつれいさますけれどあのとながくあひ
びきをしなんしちやアおいらんの身がつまるば

かりでスからどうぞこれをさいはひにきれてお
くんなんしといつてくれたのぞますからわちき
もアノ人ゆゑちやア茶屋しゆにやアあいそをつ
かされるお客はしくじつてしまふし四年ごしい
い人にとつてゐた作さんまでなくなつてすッば
だかに成たからにやアたとひすみかへに出て小
格子へ下つてもあひとげようと思ひこんだもの
を今さらわづかの金銀づくであいそをつかさね
るのはざんねんでならないし。トいつてほかに
さんだんのしかたもなし年季もきふにやア入れ
られないしどうしたらよからうと一寸のがれに
あとからもたしてあげるからとつかひをかへし
て梅が枝のことを思ひだしてサ。ホンニばから
しいわけですがが廣間の手水鉢でむけんの鏡を
つかうかとはしごをあわててかけおりとたん
へ伊賀はんが來なんしたから不圖おもひだして
おまへのうちへはすまないがあひたいむしんを
いつて五兩もらつたのをすぐに大音寺まへまで
もたしてやつた急場の恩があるからそのばんは
寂ずにつとめたもんさますからいゝ色をとこの
氣になつてまいばん／＼せつ／＼に通てくるの
で日ごの小づかひにもこまらないしもの日のし
まひもしてもらふしき着もうけてもらつた
りして仲の町へもあそびにでられるやうになつ

て一件にもたまにはあはれるのは伊賀はんのお
かげだと思つていやで／＼たまらないのを情人
のやうにとつてゐたんざんすヨおまへのとこの
客人をわるくいふのちやアないが何處の女郎
衆だつてあんな世助のうぬべれをとりとめるも
のがあつたらかけざんすそしてふだんのやうす
といやア麻風呂敷に茄子ですす／＼いふことが蜻
蛉にサの字にサおれのあそびかたはどうだ
のかうだのと通がつてゐるンざんすが田印の青
竹(あきとけ)といふことは牛に花りん糖さんすヨ
といふこと。エ、いけしやアつくなやけたらたづねて
來いといやアがつたくちをわすれやアがつてサ
しづ／＼で五兩ばかりな目くされがねをだし
やアがつたからしやくにさはつてたゞきつて
かへらうと思つたけれどなかやどのまへもある
からふししようしてもつては來たがこればかりな
はしたがねをもつてかへつちやアしかられるン
ざんすヨオなんだエおはねどんおそくなるとエ
いゝちやアないかおそくなりやア人力車がある
からびく／＼おしでないヨこれからかへつたら
なり田屋かすみだ川へいつて正孝はんか民中
はんをよびにやつてのみなほしをしまほうなん
だエひら松か錦つるがいゝとエわちきやアひ
らまつやきんつるはせかれてゐるンざんすオホ

○半可なまぎょの江湖談うきよばなし

計町の炭俵ヨソレ河岸のすみやサ彼は圖南の門
人て晝體も可なりにてきやス俣詣もさうおうに
やりやす彼人と俱に薪炭をつみこんで河岸へひ
いてきた大八車へ『フランケツト』をしきまう
けて是へあひのりをきめやまの車力兩人をや
とひとみのおしだすところはくらまへ通り人力
車の待す来るサ目まぐるしい中へ。ヘンサカホ
イでひきだしたら世間億萬の俗物めらがおどろ
きものゝ木さんしよの木あざけるやつらを耳日
にふれず大通りを馬喰町へかゝって魚店から
左へまがり横山町を直路に本町室町からく
わたるのが日本橋夫から高なは十八町半の
小便だらくきふに鐵道見物おとまりはぜひ南
品といふところを連にひかれて無事に歸宅サど
うだこりやア近頃のひねりだらうトキニ斯牛家
が行はれちやア天ぶらのたねにつかふとこがあ
りさうなもんだがそこまでにやアいたらねえが
こりやアきつと奇妙だヨてんぶらといやア出揚
の扇夫が故人になつたさうだがかれも東京の名
物ものだをしるまゝときちりてこそとはいふけ
れどかれなぞはをしむにもあまりある人ぶつサ
一題聊は正行流で嗚呼執心汝の馬鹿と田町の
湊屋に美名をのこし狂言は警流で円齋仁右衛
門の直弟なる事ははこのあたりにかくれもない

し清元はお玉が池の太兵衛直傳。一中節に靜太夫の名前あり石切がしるは眞老人をこまのあぶらの烟にまき久保町の多賀屋から萬年町の鎮水子までをころもの粉でかきまはした手際はなかなかのうで前サネうでといやア喜三郎の活人形がおひく番敷がそろふが彼奴は當世の左甚五郎だネ人物を見ると極質朴だが細工にかけちやアおそらく日本一だらう日本一でおもひだしたが東京中の實をあつめて淺草のおく山で博覽會をするつもりだからそのときせわにんになつてくれると小林椿岳先生と平瓶雷先生にたのまれたがイヤはなやしきの地つゞきもあのとやひが住みやアおひくひらけてにぎはふだらうオヤおめえへどらい先生をしらねえかソレ寫眞好の北庭新波といふかはりものヨに人間もイサ葉たがうせいおもしろ味があるなウツレおめえも附合ツたらう横山町の犬又ヨ彼奴が道了さつたの開帳で蹴鞠の見世物を周旋して金かたをけちらした滑稽があるヨ出方のものが辨當の手あてもねえから大又をさいそくしたら鞠沓をみんなのまへはふりだして脱走してしまつたのは沓でもくらへといふなぞだといつたのは大わらひのはなしちやアねえかはなしといやア小さんがよこはまでむらくと改名したところか



(囊掛話敷座の妓歌本原)

て牛皮のお菓子だらうぢやアないかさうたい
まのわかい藝者しゅうはふさげてゐるわねちつ
とおきやくにからかはれるとなきだしたりとし
きをもらつて歸るのヤレあのお座敷へはでられ
ないのとサ何處を押やアそんな言がでるだらう
藝といやア座付がすんで三さがりから二上りど
どいつに角力甚九がはなれちやアかつばがをか
へあがつたやうで梅はさいたかもけいこ中のく
せに客のえりきらひをしてすこしむかうづらが
いゝと自惚きつて三みさんの胸へまくらがみを
あてがふさんだんばかりをしてたまに瀧い客の

座敷へでもでて三結なしにうき世ばなしにでも
なるとあくびをしたりたゝみのちりをひねつた
り兄守子がおとぎによばれたやうにざまはな
いヨお客がはうたをうたふとか一申ぶしをかた
らうとかいふとはるさめやわがものもしまひま
でまんぞくにはひけず夕がすみも『まだそのく
せがといふカ、リ之處ばかりでくらべばたんも
『いちばいしほのみちのべにちやうちんあれど
こひのやみで。おしまひサそれでげいしやもね
えもんだわねわちきなんざア十三のとき北廓で
ひろめをしてやかましい合しゆにひきまはされ
ておざしきのたンびにばちのさいじりでコツコ
ツやられたりもゝをそつとつねられたりいぢめ
ていぢめていぢめぬかれたかはりにやアたいこ
から二ちやうつぢみをどりは花柳の出げいこと
西川へかけ持のけいこサ清元は山谷堀の延津賀
さんに通つてもらふ長うたは彌十さんに來ても
らふ一申ぶしは代地の序遊さんの弟子になる義
太夫は岡太夫さんにをそはつて十四の春金子で
さらひのあつたとき男藝者衆にこのまれて三味
せんをひいてやつたようた澤ぶしは虎右衛門さ
んや芝金さんをよぶにやアおツくらだからとか
かへられた内でもいふからそれでもしらないぢや
アくやしいと思ふので中尾やの幸佐吉さんの處

へいつてをがむやうにして教はつて三十番や四
十のはうたはおぼえたのサそれだから町へ出て
から柳ばしでも堀でも下谷でも金春でもげいし
やひととほりのことはつとめたからこんな場所
ゑへながれてきてひい／＼げいしやとつきあッ
てゐるのはおそれるけれどばゝアげいしやにな
ツちやア氣がひけていひたいこともひかへめに
してゐりやアいゝかとおもやアがつて鶏卵のか
らがとれもしないおきやアげいしやのくせをし
てなまきゝなくちをきくからをかしくつてたま
らないわねしかしげいしやの沽券もさがつたが
いまではおきやくもふけんしきたヨやうやく二
ほんか三ぼんの玉を買ふとぬすみばかり賣らし
たがつておざしきでなけりやアふだん着のまゝ
でいゝからちよつとあいさつに出てこいのヤレ
しんるゐ附合で一日桑又の帝釋さまへでかけよ
うのといろ／＼なねつをふいておくりおほかめ
のやうに轉んだら食はうとはかりねらつてゆだ
んもすきもなりやアしないヨ町人のとほりも
のがつて何處町さんだとか又併名だとかを名の
るちよびすけなをいふよりいっそざんざりあた
まで甚九もちきりのおきやくのはうがしまつが
よしわたりのもきざまないからげいしや料理
やのためにやアいゝけれどもおなじざんざりの

なかでも書生とよさんは人があるくつて唐人のお尻
がおいねえ一六のどんたくに五人一座でげい
しや一組ぐらゐを柳半か藤本へよびあげてらん
ばうにさわざちらしてどろんけんの揚句がむか
うの寫眞屋しやうしんや三草堂さんそうどうと銘なづけ
つてげいしやとも七人いちどにガラス一枚へう
つさしてお茶やおくわしをさんぐあらしてサ
わちきたちが後で先生へいひわけをするのがど
んなにつらいかしれやアしないわネウくげ
いしやもさきが見えてきちやアあがつたりだ
ホンニいんぐわしやうばいでいつまでもうだつ
はあがらないとおもふからこれまでたびく見
切つてあしをあらつたが亭主をもつてびんぼふ
でもするとこんなしみつたれな所帯をはるより
はいつそげいしやがまじだらうモウ二三ねんう
はうはしてくらして見ようと思まみえをしたり
鐵漿水てつじょうすいをみがきおとしたりしてひろめなほしを
したのもたびくだが何に成つてもぬれ手であ
はをつかむやうなことはないねえホンニサげい
は身をたすけるほどの不仕合とやらで川はぎは
川ではてるわネオヤ巴のどんおまへモウござん
かなんだネまだいゝちやアねえかモウ一杯おの
みといつたらモシねえさんアノごめんだうなが
ら生でたべるのだから精肉をうす切にして山菜

醬油じやうゆをつけて二人前ふりにんおくれヨそしておてうし
 をごくあつくして三枚さんまいでもつておいでついでに
 五分葱ごふぶとお香かうのものをサオヤ／＼むかうにゐる
 さんざりはききのふ八百松はちまつでよばれたおきやくだ
 ヲ聞きこがわるいねえ巳みのどんつい立たをこつちへよ
 せてわちきのかげをかくしておくれどうしたら
 よからうエ、かまはないチエツ知しれたらしれた
 ときのことサねえ巳みのどん

○ものしらず文盲のむちやろん無益論

△と云ふは十の位の原じよめかけつ男ばかりにだうもなされねども
さへいつきてかしのやぐしがきこくを中人のあひだにはなしほどま
十七字がやうやくにつづいてよくていふべきなり

さのおめえとはかく柳桐やゑんてうのつゞきは
なしがすきだけれどチト講釋のはうをきいて
見なせえそりやア天下の御記録よみだから又お
としばなしなんぞとはちがつて賃があるネこの
せつ駒形の席―晝は伯爵夜は燕尾が出るがなか
なかおもしろいぜおとしばなしをもかしつけて
い／＼けれど根がこしれえものだからきいてしま
ッてからはゆめを見たやうな心持だがそこは
實録のみつしりした徳にやア大関記でも後風土
記でもがうせない物だよちよつとした處が太閤

秀吉公の智識なんぞといふものはすばらしいネ
うまが尾州愛智郡中の中村の百姓筑綱と
いふあみうちの漁師の子でサおふくろさまは在
郷中納言エ、なんとかいふ公卿のむすめサオ、
それ〳〵藤原の行平あそんサ此あそんさまがネ
なにかしくじりがあつて須磨の浦へながされた
と思ひなせえその浦の汐を汲海女となれそめて
その腹へできたのが太閤さまのおふくろサだか
ら後に前の關白大名大盡といはれるほどな子
をうんだのだが因縁といふものはこはいもの
サネそれからその公家のむすめをおふくろの海
女が手しほにかけてそだつた處がてゝなし子だ
もんだから土地のものがばかにしておめえのと
ツさんはなんだ〳〵とからかはれるとそのむす
めが。あまが子なれば父もさだめずといふ歌を
よんだもんだからなるほどくげのおとしだねに
さうぬねえとみんながかんしんしたらうちやア
ねえかダガ歌といふものはがうせい徳のあるも
んだとこの間花酒がかうしやくのひき語にい
つたがちげえねえやけどをしたときにやア。
さる澤の池のだいじやが水まして。いたます火
滅すひりつかずあびらんけんそはかといふ歌
を三べんとなへりやアそくざになほしん鉦がな
くなつたときにやアソレ。清水の音羽のたきは



(本原「無言論」加筆)

つさるとうせたるはりのいでぬことなしトこ
れも三べんとなへるとすぐに針がでるといふか
らふしぎぢやアねえかふしぎといへば道灌山
の螺抜（螺抜は螺を抜くこと）彼所を道くわん山とつけたのはむかし
太田道灌といふ人が城を築いた場だからサ。そ
こでその人がつねにいくさに用ひたほら具を天
下泰平に成たから山へ埋てしまつたのがだんだ
んえだつてこんどぬけ出して天上したといふひ
やうばんだがこりやアありきうなことだ何道
灌も歌をよむか。うたをよむの外の（外の）ごん八ぢや
アねえそのじぶん大ひでりがあつて青天六十日
の間雨といふものは一トつぶもふらなかつた
時相撲のたいこをかきだしてドデフル〜と
たゝきながら三めぐりの堤をあつちこち面乞を
する處へ道くわんさまがゆきあはせて。いそが
ずばぬれまじものを夕立や田をみめぐりの神な
らば神とよみあげてみめぐりの稻荷の御神前へ

納めると今迄はわつたつたそらが一めんにくも
つてきてたちまち大あめが降出したもんだから
道灌さまもぬれしよぼたれて關屋のきとのある
百姓家へとびこんで雨具をかしてくれとたの
むとうちからきれいなむすめが山ぶきの花をぼ
んへのせて持つてきてものもいはずに出すとそ
こはもの知りだからかんがへたネエ、萬能集と
かいふうたの本のなかに何とやらしてやまぶき
みのひとつだになきぞかなしきといふ句がある
さうサそれを引語にして装一ツもないことわ
つたのが藪にも功の者百姓のむすめでもばか
にやアならねえわサやまぶきといふ物は花がさ
いても實がならねえからのことをひきだしたの
はおそろいつたもんぢやアねえかだから理づめ
ほどこはいものはねえと思ふヨこはいといやア
此年肉に立立たと見えてだいいふこはいぜコウコ
ウあんなえさきやきにしてモウ一鉢はやく〜

○人車の引力語

▲「たつしひかりし力方の車力二人、れきのなきん、いゆきのなが丁は
ひかにたつと見ゆ」とももの下、白馬つはうをうしろのこみ
とかけのあたゝいりてをむすねをすね、まづうはだをあげて、はつつの
だきをあらはしたるてい國のことし、車八人、力やおらアきの
ふわんでさしあつてつよはたとん、はん、力やおらアきの
ふほどほねのをれた仕事はなかつた。あさツば
らしんばしまでいそぎの仕ごとで、淺草見附から

貳朱と二百のたちで引て行と橋きばで下りたか
ら歸りをのせて来ようと呼かけてゐるとおれが
めえかた赤岩に居たじぶんなじみのてんま町の
唐物屋のばんとうがとんび合羽のきやはんがけ
でやつてくるのを見かけたところたしかによこ
はまのかひだしと見うけたからモシ旦那おひさ
しぶりでござりますとこゑをかけるとお、八公
かひさしぶりだのときにいまから大いそぎで川
ばたまでやらねえかといふからねもきめずにな
ぐにのせたわそこで腕と車をつぐぐだけいそい
だところ、ぬええに用はたまで着と大きにぐく
う思ひのほかはやかつたと二分の立前に酒手が
貳朱ときたので半日仕事に三分あまりヨそれか
ら大森まで引えして山もとで茶づつてすこし
くたびれたからぶら〜明けえすと跡から來た
客人はこれもおなじく、濱の歸らしいこしれ
えよ足元のゆるんだ處をやりちげえに見つけた
から旦那淺くさまで歸り車へおめしなせえやせ
んかとすゝめけたら見附までいくらで行とい
ふから何サ仕立の歸りでござえやすからいくら
でもおぼしめしとやツつけるとそんならいそぎ
で半分やるから田町までやつてくれるとのりう
つるがいなやいさくさなしにはらで、着當をき
めて七ツめえに田町のつきあたりから右へまが



(本原) 古方今話 (挿絵)

くともなまゐひが多イちやテ食うたりのんだりで
できればこそ百に一升の米食うたときもやは
り藤着た者もあつたから憑貴々夜ほつをする徒
は全體おのれが淫亂ゆゑ自己と我身をくるしめ
るのちやとかく東京は繁花にすぎで奢侈がつよ
いちやから裏店にすむしよくにんどの妻やむ
すめなどが紡績の工はすこしもこゝろえずうた
じやうるりやをどりなどの遊藝のみをこのんで
びんぼふかくしとはいひながらちよつと出るに
もお召はんてん絨物やはかたのおびを纏芝居
話席親物場が見たいまゝ神佛の参詣をかこつけ

口に美食をこのみ終に夫の身上を食倒すぢや
テすべて衣食のおごりはどうかひどく禁じたい
ものぢやテ トこれはなほのうちよくとりや 仰し
やればじつにさやうでござい升スせんこくのお
はなし通りきんぐの比例をかんがへて見升れ
ば貴いやら賤いやら條理がわかりませぬ先手近
いところで愚案いたしますれば舊八文の浴湯錢
は當時四十四文と申ながら文久錢と鑑がまじ
ればものと十文でございますから二文たかい觀
定青錢なればいぜんとどうやう十二文錢なれ
ばものと四文で四文つりをとるゆゑはんぶん直
よりやすいわりでござります又髮結賃もその比
例で丁度半ぶん直。ト申て當百錢ではらへば
六倍になり升が米は大都十二倍布帛のるは六七
倍ゆゑおなじわりにはまゐりませぬが工匠の作
料諸職の手間もみなそれぐにあらがり升たゆゑ
米がたかいと申てさほどにこまるはずはござり
ませぬテわりのわるいは乞兒ばかり鐵錢より餘
やるものがなく文久を與ればつりを取りますが
無勘定のひとは青錢をもやることがござります
からどうか入レあはせになりませうハ、ハ、ハ。
デござりますが東京もおひゝ華族さまがたが
ふえて御永住になるといふふうぶんでござり升
ゆゑ舊のはんじやうにたちかへりませうかい

かいでござりませう。▲さればサ一寸さきは
闇で僕などが淺智に分ることではないが設令華
族方が東京住居になられたとて是までのやうに
はなるまいとおもはれるテ先街道々々の大通り
の分は依舊にして裏町々々の偏僻な所は眞中
へ一集にまとまつて跡は開墾が出来茶園桑園
に成つたから七八年もすぎたら製茶園桑園がさ
かになつて老少婦女子のよい職業サやがて人手
がたらぬでこまるやうになるであらうそのとき
には百人千人がするわざも一ツの器械で便ず
るやうにひらけるには疑ひない斯なつてこそ眞
の繁昌サ國產多きは國の富ぢや。僕も舊は和漢
の書をすこしばかり讀いたけれど横文字ばかり
は大きらひ鎖港攘夷の説を唱へたが斯まで互
市がさかんに成つては外國の實情を知らぬも
ふじうで嫌うた事をくやんで居れどきりとて
自髮をいたゞきながらエビシをまなぶもはづか
しいゆゑ譯書だけを讀でかの國の事情はすこし
わかつたから以前の説を覆逆にして開港互市に
あらざれば富國強兵の策なしとおもふこゝろ
になつたぢやテそれに東京ばかりぢやない諸國
とも茶や蠶紙や自絲や産物が増殖て互市が益
さかになれば 皇國の富となり富は大砲や大
艦も自由に出來るは知れてあるから地球の中の

強國となるとおもへばナントたのめしいこと
ではないか東京が不景氣ぢやの寂寞の酔ぢやの
こんにやくぢやのと云のは理にうといやからの
いふことぢやチ ① 例を伺ひますれば實にさや
うでござい升わたくしも老の學文に翻譯書でも
よみませう實に西洋流でなくては夜があけませ
ぬオヤ／＼とかく申うちバツタリと日がくれま
したモ一ツめしあがりましてあとは御飯にいた
しませうコレ／＼あねえなまのかはりとおかん
のよいのをそしてナ鍋が煮ついたからとりかへ
てくれないかへい／＼これはおそれ入ますオツ
トホ、／＼へいございます／＼

牛店
安愚樂鍋 三編上

東京市隠 假名垣魯文戲著

序

種豆ハ天下ノ仁術肉食ハ萬民ノ滋養ナリ
故ニエニ牧牛ノ國家ニ益アル豈他獸ト等シ
カランヤ方今開化措ク進ミ市井ノ細民ト
雖モ牛痘牛肉ノ世ニ功アルヲ知ルモノカラ

隨ツテ醫治ヲ全シ億兒百歳ノ壽ヲ存シ
從ガツテ食料ヲ調シ衆庶健康ノ體ヲ保ツ
ニ至ル今日ノ儒術何事カ是ニ如シ此頃魯子
ガ著述ノ小説安愚樂鍋三編ノ稿ヲ披閱シテ
談笑諷諭ノ筆意ニ感アリ小道トイヘドモ見
ルベキモノアリ嗚呼談何ゾ容易ナラン依リ
テ簡筆ニ一言ヲ贅シモツテ感讀ヲ謝スルト
爾云。

于時明治第五年壬申ノ孟春吉旦
東京淺草金龍山下ノ旅店駿州屋ノ
小坊ニ於テ陸中國水澤ノ贅醫

臥牛散人 小野涼亭記之

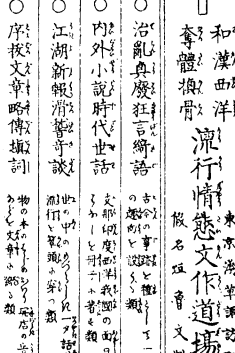
告 條

梨園の立見。一日に充ざれども。俳優の藝
頭を儘に評し。花街の素見。一夜に盡さど
れども。娼妓の品定め。殆ど委し。銀箔の
月明鑑きにあらず。物言花手折し事なし。
或は戲房に不入して。三階の事情を穿ち。
又は三蒲園に坐さずして。青樓の醜情を究
めんとする者は何ぞや。往昔所謂半可通。
當世洋號で生驅連。此境界を遁れざる徒。
化して戯作者と變れるより。我輩某が輩に

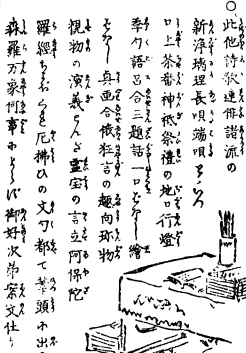
本宅 豊島区豊島
英園五丁目一
保赤牛痘所也
普賢十方
長濟方圓
印施人山牛卧



和漢西洋
流行情慾文作道場
○ 治亂典廢狂言綺語
○ 内外小説時代世話
○ 江湖新報滑稽奇談
○ 座板文章略傳撰訓



○ 此は詩歌連作群の
新澤梅屋長明庵主
○ 此は詩歌連作群の
新澤梅屋長明庵主
○ 此は詩歌連作群の
新澤梅屋長明庵主



倣ひ。翠麓屋臺。金紙戸の圖割に。詰開きの演説。紋切形を填詞み。鳳凰樓臺大中小的原訛り、アリンズ「オッス」の茶表紙を生捕る。如斯生熟きいた風。似た山連の我輩が。芝居評判花街の情態。著述に傳伴渡終あり。讀まぬ同志書かぬ同志。犬も進歩ば替者の棒頭。文盲千人。筆硯萬福。活業名利名聞と。利欲を兼し文人商個。儼の墮落の戲場木戸と。小娼格子の安店を。改正再開たる堅岡鋪。毎日に宿休無なし。日限の註文お急ぎ合點。心得無文長編なり。も。御間に合せ。トの章の假名釘も。是天性の役割番附。下手の長文ながながしく。身の爲告終さやうと謝云。歌舞歌作者花鈴魯助が道弟子花柳春日洗淑緒の同社中。

寄陽山人 假名垣魯文伏梟



(し返見上欄三本原)

當世牛馬問答

馬牛公ひさしくあはねえうちてめえはたいそうしゆつせしてらしやのまんてるにずぼろなんぞですつぱり西洋風になつてしまつたぜうまくやるな 生オ、馬かてめえこそこのせつはたいそうりつぱな車をひいて一六にやアにぎやかなとこへばかりどんたくにでかけるさうだがうらやましイぜおれたちはうしくとせけんでもてはやされるやうにはなつたけれどホンのみやうもんばかりでうまれてものごころがつくつかねえうちにはなつたをひかれてつきぢや横濱へ身をうられたあげくが四足をひへゆはひつけれられてボンコツをきめられてコにんげんのばらへはらむられてじつにふさいでしまふわけサ 馬「イヤさうでねえせんてえ手めえのなまはたかなはのせんばや大洋のしばやまちあたりでくるまをひく身の上ぢやアねえヨてんたうさまからにんげんのしよくもつになるやうにこのせかいへおらみつけになつたのをまだにんげんがひらけねえところからなりがおほきくつてつのなんぞがはえてゐてちからがありさうに見えたも



(原木 當世牛馬問答二挿畫)

んだから重荷でもしよはせようといふおもひつきでこれまでこめだはらをつみこんだりさいれいのねりものなんぞをひかせたのはさつたくににんげんのこゝろえちがひだはひらけそくなつたにだけれどうしはもつをつみはこびをするけものぢやアなくつてひとのくひものになるものだとか心得てゐたから大牢のじみだのばつべうのいへには牛家をかはすだのといつておいたうじ開化とやらの世の中ぢ

やアにんげんはもちろとりけものでもすべ
てしやうあるものはそれ〴〵御泰公をせにや
アならねえとある先生がおつしやつたのを馬
の耳に風にしずにきゝとめておいたがためえ
のなかまはにんげんにくはれてばんもつのか
しらのからだをやしなふのが天への公ダボ
ンコツをきめられて人のらはひりやアて
めえたちのやうがすんでちくしやうのごぶが
めつして人間に生れかはるだうりぢやアねえ
か人間でたとへようならしんばうしとげて且
那からのれんをもちつて出店をひらくのだぜ
ハテサねんがねん中わらやあづきのから斗く
ツてねてくらすよりは天への泰公を勤上て
畜生だうのくるしみをさつて人間かいへ生を
かへる方がよからうとおもふぜこちとらは人
間の口へはひらうと思つてもたれもくツてく
れずまだしも赤馬はかさをかいた者が薬にく
ふけれどそれはたまの事だからごふのめつし
る時はねえ生きうきけばなるほど尤だモ
ウモウぐちは云々えア、牛のわもでねえ

○商法個の胸會計

▲年毎に三十一日といふのは見れば見ればはかりがきつておのづからへちやんといふやうなものとてふ

あらはれしは江戸に上へ着てはなかくてながらじまにまがひま
さの半〴〵は江戸に上へ着てはなかくてながらじまにまがひま
日たのやうにうなるかゝるのやうな時をうけるはすんだと見て
くたのやうにうなるかゝるのやうな時をうけるはすんだと見て
つれのことともうなるかゝるのやうな時をうけるはすんだと見て
り「商法個さん牛肉は横濱のことだが此家の
ずるぶん食へるねえおいらア知已だけ亭主が
並より氣をつけて極新らしいのを食はせるから
はじめの牛肉なんぞへはめつたにはひらねえ
ヨ此あひだまで十二字すぎになつたから腹が減
てたまらねえ處から或る牛店へはひつたところ
が店のかゝりを見るときかまき今月のはじめま
で鰻の蒲焼骨抜どちやう柳川流の出来合店を
牛肉に替れて牛は牛連れと出なほしたと見えて
イヤ事馴ねえで下女なんぞがからツさし牛間で
五分葱をくれるといふと昆布はござりませんノ
生をちうもんすりやア鶏卵を持つて來たりおま
けに肉といやア日向へ乾たこつばを見たやうに
カラ／＼して筋だらけでいくら喰んでもちぎれ
ねえ古臭くなつた老牛を食はせられたので替り
に手付ねえでかんぢやうをして飛出したが實
に牛肉ばかりは目増はまつびらさしかし福地先
生なんぞは古臭いのが可といはつしやるが素人
口ぢやア居て二日おあたりが最上ダネ最上と
いやアこんどあめりか十八番から引取つた羅紗
は綿なしの上物ダガ十行李まとめて賣てえも

んだが急に買手はねえかネ何サ店で小賣にさせ
りやア百圓ぐらゐはまうかる品物だけれどおい
らア一寸神戸まで船行て來てえから爰で代物
を格幣に引換ねえぢやア都合が悪イからサエ、
商さん南京米が築地のある商館へ千俵ばかり
着たがどうだおめえ買はねえか何まだ下落する
とウゝ其處ダ賣主の異人も日本がこれほどまで
下りやアしめえと思つて積込んで來たところが
香港でしけをくつて久しく逗留してゐたうち日
本相場が下つたもんだからがつかりして當時
ッておくつもりのだが彼奴等の目的でもまだ下
るとふんだから損毛承知で賣つてしまふ了簡だ
から其處へ附込んで性一ばいねきりつけて買浴
す策があるヨ其代り周旋が欲藏だから一わりの
分ぢやア承知しめえが其處はよみと歌々おいら
が半口ののから欲藏を周旋さしちやアどうだえ
ナニ油を買つたたとえコウ／＼地水へ手を出す時
ぢやアねえそれよりは赤銅を買つて見ねえか
此間商館から利助が歸帆してきたが彼處ぢやア
たいそう異人が買ひ込むといふからばつとし
えうち買ひ込むのだぞおいらア神戸へ行かねえ
と爰でいくらも買ふのだけれどコンペイニがさ
きへ立ツて居るからどんな利易が降つて沸かう
とも爰ぢやア手を廣げることができねえから殘



(飛插「計會胸の個法商」本原)

念ダナニ 神戶は格別の大商法といふのぢやア
ねえがちつとばかり目的があるのサ佳くいけば
ひとしほのおなぐさみだがまづ損はしねえつもり
サそれに今年には是非上海か瓜哇あたりまで航
海してみつしりとまうけるつもりサ何んでも大
商法は洋航しねえぢやア 大利がねえから去年
あまりかの『サンフランシスコ』の博覽會へ行く
つもりだツけが吉原の立退へ引ツかゝつて大散
財をしたのでとんちんかんとにけりサどう
か二三年の内に世界中の繁昌な港へおし波ツて
大六や伊勢筋なんぞにもおとらねえ身生に成ツ
て濱の高島やの上を越して一年に十萬兩ぐらゐ
なお易を上納してえもんだとこゝろがけてゐ
るのだヨハテ人は大きなことをのぞまねえけり
やア開化の人物ぢやねえヨ 酔てほろをふくのぢ
やアねえが是までおいらが見込んだ商法に五
分ははづれたことのねえのはそが腕前と肝ツ

王^き々ははがりながら一掃^{いちほう}ウシとふんめえりやア
五^ご萬^{まん}や十^{じゅう}萬^{まん}の金^{きん}貨^わは忽^{たち}ち手^て元^{げん}へ積^つ上^{じやう}リアエ、コ
レサ^{しやべ}商^{しやう}兵^{へい}衛^{ゑい}さんしつかりしねえオヤコクく
と船^{ふね}をこぐのかハ、ア果^{はた}報^{ほう}は寐^ねてまつもりか
ノオイくそんな不^ふ勉^{べん}強^{きやう}ぢやアまうからねえ
ヨしつかりしてモウ一杯^{いぱい}ア、いくちのねえお合^あ合^あ
だいくちのねえお合^あ合^あダ

○芝居者の身最良

を植てもしみつたれな樹は植込まねえからおのづから櫓に光りが出てサ景氣がよくなるわけでごぜえやすおめえさんのめえだが人間は腹がよくなくツちやア人はつかはれやせん去年の顔見せにやア三町ながら飾り物はしねえなかで私の方の太夫元の思ひつきで三好町の玄老先生に受合して茶屋のれんへ芳鑑に似顔を畫せて景氣をとつておいて直に年尾の内に河竹さんに脚色ませて一幕かゝせて仕舞に見せるなんぞといふ趣向はお釋迦までもござんじあるめえナントすごい大將ぢやアごぜえやせんか動きやアとれやせん實に去年の忠臣藏十二時のしゆかうなんざア見物の腹をめぐりやしちやアごぜえやせんかそれに役者が山崎やに高島屋舞つる屋の老功で勉強ぞろひでごぜえやすから五分も過ぎやアごぜえせん今戸の小林平八郎に身にしみじみみとようごぜえやしたぜいこ湯茶はかならずあつたつ物ツあつたといやア強勢にえ期ダオイ下女さんあんまり肩があつすぎて腹の中で羽目を敲いて三介を悪くせ枕洗の水は劍の鹽の辛えのを調合して水ぎれダかはりをたつびつにもつてきなハテ水は安イ物牛は高イも水はたつづぶりかくみなさいアイくさよごさいツアハハ、エモシ旦那つき尾の丸をお出かなさ

と入れ替つて這入込んでの夜目遠目だが何者なるかとすかし見たら未當時の仲鶴むかしの雁八に喜知六半次の三人サネけんのんくモウ一足のことで彼奴等にとりまかれてごらうじろまさか私どもとはちがつて牛店へ連込ムりくつにやアめえりやすめえからぜツび有明樓か大七か乃至利口を見せて親類附合ごかしで敷天とでも河岸を變るかでござえやすがそれにしてもあやまつて一人前二分宛の御散財サア、危ぶし此間こねえだのやうにおめえさんと私といやな道行だがむかう越でのびあがらねば三めぐりをあとに見て平岩で内會ちやぶくをきめようと座敷へすわつたばかりの處でうしろのからかみをすらりとあけて不義者見つけたうごきやアがなと聲をかけたのをたれかと思つたら杵屋の大公に元役サネそのあとから客にとりのこされた山谷堀と猿岩町の老藝妓が二タ組サネ私もギツクおししたからおめえさんの顔を見ると其處は旦那強勢ふんぎりがいゝテおめすおくせザ落付はらッてオヤみんながちやうどいゝところへよく來て呉れた留公とさして寂しくつてならなかつたおつしやツたをいゝ汐にして三階物出でぶたいへならんでわん公が犬の顔色に蚯蚓の鳴こゑも久しイ物を辛抱してきいてやツて大さんざ

いをなすツたなんぞは浮世うきよの義理ぎりでおめえさん
のお顔おなまだからしかたも有りやせんが此頃このころは助すけ
えありませんから牛肉ぎゅうにくの功能きようのうが見えやすめえエ
エこんやはおはしけなさるとえそりやアずあぶ
んをかしい思おもひつきでござえやすが一ツ件いっけんの處
までおほくりの下宿げしゆくへ引ひきがりはつらい譯わけだ
がおいらんのむかう腮おほはいはせませんぜこんや

當場扮作

演戲道人

當場拍作
丑生安
惡貌羞心
相見如
天地從來
如雜劇
世營一的
介無私



演戲道人

官廳

光可

(畫插) 履蠱身の者居芝(本原)

はしつかりときばがありさうなものでござえや
すエナ私^{わたくし}の登^{のぼ}り^{あがり}の妓家^{きや}へ附^つ合^あつて下さるエ
そいつはありが對面^{たいめん}曾^そ我五郎^{われごろう}のせりふぢやアね
えが花^{はな}まちえたる今宵^{こんよひ}のおほせハテめづらしい
バタ^{うか}。バツタリまつたりあんまり
浮^{うか}れて又杯洗^{またげせん}をひつくりけえしたオイ、ねえ
さんや雄巾^{おんど}だ、

○やぶいしや藪醫生ふやうじやちの不養生

▲九尺開口を以て門札に本道外科とわりがきに於ては、關なしのすぐにくつぬきたのみならずといへば先生みづからしやうじの内にてどう

のりのみかかへてひとり一人は「ア、けふはきむかつた」
 とまに病家から人がきたと思つたら愚老などに
 はなか／＼手も付られぬ難症の様子ぢやから切
 抜ようとは思つたがまゝヨあやふい橋も渡らん
 ければばぐれ當りといふこともないと思つて
 診察してをる處へ親類共から立合せるといふ西
 洋家の散醫者めが出かけてうせをツたでその
 場をゆづつて直に脱走もきめられんから談合し
 て見たところが彼になか／＼の功者を見えて愚
 老などが足元へもおツ付くことではないからい
 いかげんなごまかしをいッて脱して來たが當節
 のやうに醫道が盛んにひらけては一丈不通の愚
 老などが醫者の眞似をしてゐる處ではないテし
 かしなればウ物しらずの愚老等でもこれまで漢
 家の行はれたうち葛根湯とか大柴胡湯だとか
 あるひは藥名も大黃人參甘艸陳皮ぐらゐはおぼ
 えてをるが漢醫は古方後世とも廢止どうぜんの
 時世に及んだゆる廢業で生活をたてるのは洋藥
 の名目も口元だけはおぼえなければならんが



(源木園の養生生活画)

髭くひそらして今から學ばれもせず別に藥名ばかり間に行ところもないから病家へまねかれて今日のやうに西洋家と應接をする一段になつてくると蛇に會つた蛙どうやうですくんではかりをらにやアならんそのたびく／＼に半年ヅツも壽命をちぢめるのだからどうでも廢業して持前の野郎間と店をだしなほすが上策だわいぜんたい醫者は付たりのつもりだが商賈みやうりで折ふしまぐれあたりで全快させる病人もあるものだがひいさの引だふしでそれらが愚老を活藥師の如く思つて周旋して哭るのが結構めいわく千萬サそんなめんだうなことより淺草の十二軒が兩國のならび茶屋あたりの知己なる處へ腰をかけて網を張つてゐさへすりやア何處かの出入場の息子か乃至若い者などに用賣わさ其處でイヤいづれへとかどちへとか敵にこゑをかけられやア後を見せる敦盛はねえからこ

れは先生と這入コンで来るのをこちつけて鏡面皮勿論で一す一杯いかでゴスト無理こちつけでも割煮店へつれコンで上月でも下月でもえりきらひなく口をかけてやつた老妓と合併してさんざんにしひつけて彼奴の懷中をお爲こかしで御用心であつかりおいた中から會計とその日の立前を此方へちやくぶくしてあはよくば藝妓の尻尾を持上げて枕金の小釣をとるかきもなくば人力車の二挺仕立て吉原へでも引取つて知己の茶屋へ送り込んて伊勢六の五階見物とか金瓶の異人館一覽とか號して大興行をさせて利徳は茶屋とたゝきわけ遊興おんぶの先生株サかゝる仁術を施こしつけてゐるゆる一服三分や五ふんの藥禮をあてにちゝむさい病人などを煮湯かへしにはしてをられんア、廢業々々しかしまるで業を廢したら風邪妻の小造ひとりできぬわいイヤく／＼どうでも醫藥に關係してをツては嫁娘の媒妁地面家作の周旋方の邪魔になるから本道新和と割煮の妻札を收除て武佐卿欲庵とばかり書いておかう。そこで切主あたまでは舊弊が一洗せぬやうやから當世様にどんぎりと髪をかへるが名策ぢやデ。イヤかれこれいふうちモウ七字ぢや飯は宅で食として鍋一まいに酒が二合コレく女中こゝのかんぢやうは

いくらぢやく

○落語家の藥屋座

▲としのころ二十三いふなを白く大たふさ四朝か腰枝を張つてゐるつもなれと申入ま二三まいあたまでかうきゑをなするうゑになしのしめけぬしめけぬの去年のはなをたりまてゐたんだんがのきんちといはれたが者がしかにくはれてしかのなへんがきこれいたがなまふあはなはいわへのしおかりににめしめしめんの二まいぞろひぞろりとしたこしへへ、おかしだしはしんらんちめめせとわめはいづつかうなものとちめはれたりそのせによいげにんぶりて女きくでもとりまてゐんまごかきまてたまききやいづれに女のこと知るべし。ねえさん銀は飯のとときとしてスツアの吸下地で惣を細くそいで鞍下の極といふことをそぼろに刻んでヨばらく／＼と入れて二人前持て來なそしてお酒はいゝのを二ツ繰熱だヨナニサおいらだといやア親方が知つてゐるヨ氣がきかねえ少安グじれつてえへ、へ、エモシ若旦那どうでげスあなたもとうく／＼西洋に參こまされて牛をあがるやうにおんななすつたのははふしぎでげスネ何でも牛をやらねえちやアすこやかにやアイきやせんまいく／＼私どもの連中でも牛や家のはなしをしてもおそれるといふ面をした者がござえしたるが鹿が牛や家を食べるのは友食だからといふ譯かと思ひやしたらエモシひらけねえ手あひぢやアござえせんか何かけられるとか不淨だとか譯もしらずに只おそれてゐるのだからこまりやすが近頃は連中もおひ／＼ひらけてきたと見えやして夜席の出がけなんぞにやア牛

で杯一しめたるうへでかけ持などをとめると高座でどんなにかしやべりいゝかしれやせん。へイオット、ゝゝ、ごぜえますすゝさうたてつけていたゞくと夜席がつとまりやせんふだんならぶツこないても一ばんぐらゐぢやア客のあたまの減る氣づけえはござりやせんが初日から三晩目でござえすから爰が要といふ處でげス。へイ盡席は長右衛門で夜るは並木亭で一寸中入前をつとめましてすぐに東橋亭の切をはなしてそれから吉原の新席はねでござえやすへイ有りがたうマア御ひいきのおかげで昨ばんなどは百五十足ばかり参りやしたから並木も東橋もまづ大丈夫三四百はめえるやうになりませうとぞんじやす。並木は圓朝の後で東橋が小さんむらくの後といふもんでござえやすから強勢がが折れやすが燕枝と私が一トばん代りに中入前と切をつとめるのでござえすからまづ有がたいことに赤首で前つらアうまりやすそれに燕枝が當春のはなし初に自作やした鼠の花おぼろの月影といふ咄物をはなしますのに私が吉原新聞今様姿といふものを新作しやしたから今夜つから四五晩のつゞき物ではなしやすがどうか若旦那な一トばんお聞にお出なすつて下せえやしからうまをしちやア音をいふやうでござえすが私もしか

にならぬ。前方^{ぜんぽう}有人^{あるひと}の弟子^{でし}ぶんになりやして作^{つく}の道^{みち}もすこしやりやしたからどうなりかうなり
まゝとまつてはをりやすがはなし初^{はつめ}からきく客^{きやく}に
耳^{みみ}の明^{あき}いたおかたがありやアそれを的^{てき}にしては
なしに實^{じつ}が入^いりやすが高座^{かうざ}の前^{まえ}で譯^{わけ}りもしねえ
くせに惡口^{わるくち}をきいたりませッけえす田^{でん}夫^{ふう}野^や人^{じん}が
あるので諸事^{しよじ}おそれやすヨヘイ／＼、／＼、／＼、



(書相「障屋樂の家語落」本原)

オット／＼こぼれやすどうかこれでおさげはち
よんとくぎりの飯をしめるとしやせうぢやアご
ぜえせんか若^{わか}だんなもあんまりあがらねえ方^{かた}だ
からおつもり御用心^{ご用心}オットあぶねえすんでに第^{だい}
がとんぼをかへるとこでげしたオイ／＼ねえさ
んやアノ親^{おや}かたにさういつて生の最上^{さいじやう}をすき焼^や
だねにして主人^{しゆじん}まへたきたてでぜんはしようち
だらうのオイ／＼そして油肉^{あぶらにく}をたんとヨエコレ
コレめんだうだらうが惣^{そう}を小口^{こぐち}からざく／＼に
切^きつて熱^{あつ}湯^ゆをかけて持つてきてくん一モシ

これが異人のコックといつたらわかりやすめえ
がちやぶぐやの直傳でござえすぜき焼を食
たあとで葱の湯どほしをあがつてごらうじろ屋
西洋でござえスからサござんのくるうちお中人
にモウ一杯あがつたらどうでげスネ一番の景物
がお畑しのおとツくりヘイ一寸お二番が
お猪口を頂輕かネアハ、ハ、ハ、これぢやアと
んと前座のもののいひぐさサネいようちど
めおてうしはおつもり、

牛店 安愚樂鍋 三編卷之下

東京 假名垣魯文著

○茶店女の隠食ちやみせものかくし

[illegible]

八百や半兵衛の母とありてのふよくと仲居の眞母とがついしないう
なしにやはいなりかの茶のせ女がまがわるからついでしないう
てくれとのみと下地はききなりさよいはしてこのうしないう
なべさきなりと下地はききなりさよいはしてこのうしないう
ねのしつばをあらはしあらににじかへいゝなだきと野すつ
なへつうしににじかへいゝなだきと野すつ
のがくすつころ「おひきさんお前もうしはたふない
さつすつころ「おひきさんお前もうしはたふない

なんぞとこのあひだ氷月でおいひだつたがう
そかだまかしだぬぶんいけるぢやアないか
あきれもするヨアレサおかはりめだヨるはばあははし
てわらひながら ひき「アハハハ、おころさんおまへ
もひらけないことをいふ子ぢやないかあのとき
はソレきんちやが一座だからなんぼこんなば
アになつたからといつてまだ孫彦に手をひかれ
てつゑにすがつて鳩に豆をやるとしでもないか
らお客なんぞのそばで牛をたべる大好だといつ
ちやアまだなじみもないお方だからあんまりい
ろけがなさすぎで此惡婆めがとにらまれようと
おもふからあゝはいつたやうなものゝ實はすき
のくはのといふだんぢやアないヨぜんたい牛の
まだはやらないじぶんからあくものぐひでその
じぶんやア兩國のならば茶屋で小川のおと
くさんなんぞとかたをならべて見世をはつてあ
たじぶんで組合のかしらであひが見世へ來ちや
ア山くちらのうまいはなしをするのでたたく
ツてならないから雪がふつて見世をはやくはね
たばんがたに江戸やにゐたばアやアをさそつて

長い橋をこしてむかう兩國へいつてサもン
ぢい屋へはひらうとするとあかりがかんくつ
いてゐてまがわるくつてはひられなかつたワネ
その時は年もぐつとわかしめけてゐたときだ
からなんぼきやんでもはねてゐてもそこは女だ
けでやまくぢらの店まへを行つてもどりつして
ゐた所へ馬場のかしらの子分に穴熊といふ若イ
衆がちやうどぢいをたべにきて門口で出あつた
らうぢやアないかさうするとサア何でもいつし
よにはひれと手をひつぱられたをいゝしほに
してはひつてたべたのがお初會サそれから食つ
きになつて霜月のこゑをきくといろけよりくひ
け見えもかざりもへうたんもサその氣でなけれ
ば生物は食へないト内へ取よせてたべたがどう
もさきでたべるやうにやアいかないヨダガ本猪
や鹿はすゐぶんうまいが牛がひらけてから人さ
まのはなしをきくと牡丹や紅葉はあんまり藥ぢ
やアないなんでも牛にかぎる家も澤山はいけな
いト云ことだからモウくいまぢやアぢいはお
あひだおはやしにしてしまつて牛一ツてんぱり
ときめたヨおころさんは若い者のくせによくひ
らけて牛をたべならつたネホンニそれにやアか
んしんするヨて胸をべうりなしたやだし ころそりやア
ちつと譯があるのサ今までもおまへにもはなさな

かつたが私やア十五のとしにちやんが相親とか
にまけて母親とわちきをおさざりにして脱走つた
そを女ツつとめていひつてしまつたらうぢやア
ないかそのあとでいろく困難で家は分散して
おつかアのとが神奈川在だからそこへふたア
りながらひきとられてゐるうち、遠く出て云り
るゐるうちからおころを異妾に出しちやアどう
ださきの異人さんはゑきりすの前四郎も也とか
いふ旦那でかみの毛がちびれて赤いとはいへ、日
本ことばもよくわかるな、人なんぞと馬
鹿にするけれどどうして萬事にゆきわたつ
た心意氣のいゝ人だから今の世せかいにえりも
とへつかないのはやほのゆきどまりでそれがひ
られないのだとすゝめられるとおつかアが
とほりのよくばりときてゐるからすぐにのりこ
んできふんしだいでやりませうといつてやる
と月に五十兩で外に小遣ひが十兩仕度は別段
いらないが身のまはりをかざつてくる手あてが
二十五兩で親元がこまる者なら三ヶ月ぐらゐ結
金のかしこしにしてやらうしさききの氣に入りし
だいでさんごじの五分玉や六分だまなんぞは日
本のほゝづきどうやうでねだりしだいくれるし
合の兒でも懷姫でオギヤアときへいへばたとひ
旦那は本國へ歸らうが一生こまらせないやうに



(本原 茶店女 繪 食 座 劇)

してやるとのことだからすぐに口見えにかける
といふので人力車でも人力車をリリリ車 その日に横
はまへ行ッて目見えにかゝつたところが私も親
のためとはいふものの日本にうまれて千里萬里
さきのえたいもしれない遠人なんぞのなぐさみ
物になるのはいやで／＼はまの口入やに待ッて
ゐるうちも江戸場へかけだして身でもなげてし
まはうかイヤ／＼さうすると年をとつたおつか
アがかはいさうだからうばばみに存まれた夢を
見たつもりでがまんをしようかとつおいつし
あんさいちうへ異人さんがお出だといふのでぶ

るぶるしてサちひさくなッてゐると口入の人と
おつかアが氣をもんでモツトまへへ出て顔をあ
げてゐるとお尻をおすやらせなかつ／＼ツクや
ら私やアのぼせあがッたがはたで氣をもむから
顔をあげてその旦那を見ると木ほんたうにいゝ
男サントト此間第五郎さんがしたさんぎりか
づらの洋服じたてのとほりな人でこんなおたふ
くだけれどなんだか氣にいつたやうで私のそば
へきてあなた異人ベケありますかわたくしあな
たたいさんよろしいト。チョイと私の手をにぎ
ッたので私もぼつとしてしまッてサオホ、
オホ、
オヤたいへん。つういかれてさかづ
きをひつくりかへしてサソレおひきさんまへが
よごれるからおたちなねえ ひきオツトさんざ
んおのろけのうけちんが他のさかづきをひつク
りかへしてよそゆきのまへかけをびし／＼だ
ヨころ「オホ、
まつびら／＼ツイはなしに
實が入ッてさう／＼モウ／＼あとはさらんば
アにしてサアつきなほしお酌をしまはうひき、ま
アよさずといゝからあとをおはなしヨはじまり
をきいておちをきかないと氣になるわねのろけ
ごめんのふだをだすからそのあとのきまりをお
つけなころ「私やアとんだことをいひ出してサ
エ、口ばしッたからにやア身のざんげだかまは

ないはなしてしまふからみんなにはない／＼わ
けてよいとだし、これには／＼／＼ひき、おこ
ろさん私をそんなはずッ葉だとおおもひか此し
やうはいぢやア人のあらすそをいふのは極しろ
うとだわね口をたきこゝのかたいのはじまんぢ
やアないが山のねえさん達が知ッてゐて内會
のことをうちあけてたのまれたりまたたのんだ
りするのがこのばゝアの渡世だヨそこにじよさ
いがあるものかねころ「ほんたうに今東京へ歸
ッてきて見るとぐわいぶんのわるいはなしだか
ら口をつねッてゐるのだがツイ酔ッたからはな
しかけたのだがネエ、それからマアいゝあんば
いしきにめ見えがすんですぐに取きめになッて
その日のうちに異人館へひきとられていつて見
るとほんたうにきもをつぶしたヨうちといッた
ら何から何まできれいでホンニいやだのおうだ
のといッたのはもつたないやうで身で身をう
らむやうだッたが私に旦那が三度のごぜんも
日本風にしてたべさせてくれるうちソレこの牛
サ。アノ旦那が二度のごぜんどきにはきつと牛
をたべるのを見ならッたら情あひといふものは
ふしぎだと思ッたヨ東京にゐたじぶんにやア牛
やのまへを通るのもいやだッたがだれもすゝめ
もしないくせに牛がたべたくなッて割煮人が煮



(本 原 新 聞 生 活 插 画)

も洋服でも馬でも馬車でも勝手次第たとひ空乏
困乏の我輩たりとも往時の我輩にあらずこゝが
即ち自主自立の權だしかし自立の權だの自由の
理だのと一口に解いてきかせると無學文盲野
著の徒はそんならその身の勝手なことをしても
善惡とも政府でおとがめはないものだとおもふ
やからがあるからこまるヨ此節都鄙遠近となく
説教がおひらきになつて諸社諸宗の教道師が勉
勵するが僕が此職を命ぜられりやア静岡の中村
先生が譯した自由の理を譯解できまして世の障
昧を配したい者だテマツ一盃うしろくふくとあり

なしのうちにエ、モシすべて俗間の知覺をひらき
人の知能を弘めるのは新聞紙のことだヨ今朝米
澤町の日新堂から届イタ秋ぶんの五十八號だ
が實に議論有益なことがあるヨしかし傳聞の
誤がねえともいはれねえ演説の毎日新聞に假
名垣魯文が往還へ小便をして伏錢を取られて
狂歌を諷んだなんぞといふ大虚説が次第まで二
日も出てゐるが當人は虚名家だから歡喜雀
躍満足であるさうだがずるぶんをかしい間違ひ
サネ。ナニ是かこれは僕が徒然の餘りにかいて
おいた珍聞誌と號ス嚴述だがイヤ世の中には新
聞外の珍聞があるヨ爰にそれ斯いふをかしい建
言があるが此建白人は極まじめな篤實家で此建
言を御採用になる氣で町用掛りまで持出し
てあまりを愚弄する文體ぢやこんなものを政
府へ出訴におよんだら町用がかりまでの落度
になるとんだ男だとさんくしかられたさう
だが隨分珍説サネ此文面を鑑と酒のかはりめに
一寸讀んできかせやせうへ、ん

一 恐ながら書附を以て建言たてまつりて
凡 無用として有用に充て義經濟事務院
國益第一の義とぞんじたまつりて人民
毎戸炎夏の季に至りては一鞭蛋を生ぜ
ざるはなし此蟲人身を刺傷し短夜時間を破

り白晝の活計をさまたげい而已にて實
に無用有害の小蟲とすながら彼も億萬生靈
の小數なり採用によつて有益の一端とも相
なるべく哉とぞんじたまつりてつらつ
ら愚考致し所彼をして火中に投沒いた
しいへば則ち火氣に化し發響致しより
はからず存つき彼英國のゼームスワッ
トなる者釜蓋湯氣に乗じ神羅いたし
より蒸氣機關を發明仕いと同論に
して小力を合して大力とするの窮理とぞん
じたまつりて御府下近郷すべて御呢近
向へ御布令あらせられ毎戸取附させ
數百萬びきの蛋を以て毎日十二字刻施の
火藥の代りとおそばせられ夏季三ヶ月御
費しに相成り火藥御置あそばされいへ
ば百戰一勝の少端とも相なるべくや一粒
萬倍の成功則ち無用を以て有用に充て遠
きおもんばかりに御座り賤身を省ず愚
案にまかせ此段建言奉りて億萬一御採
用にも相成はい此上の面目有難く仕合に
ぞんじたまつりて恐惶さんげん頓首
百萬拜

淺草青龍門前

富川利 號太郎



(費福生の好聞新日本原)

○第四五編 ひきついで 出版此大輯は西洋栗毛の六編にて御披露の當世流行のざんざりあたま 洋學書生の大穿ち 其塾中實地に涉りたる滑稽 懷諧御評判々々々

ナントをかしい奴があるもんちやアねえか。是等が所謂はなもと思案ダテ理くつのやうだが有名無實で何の役にもたちやアしねえ兎角早呑込の生聞があるからめつたに西洋のはなしなどはできねえのサ僕がこんどの建白などは實に國益の第一たるもので必ずしも一個の利潤を拘らず一國の富をなし我大皇神國の貴威を地球一瞬に輝かし億萬不朽の深處を捧るのだから蚤の建言蛟のすねの兵力などとは同じうして論ずべからずサ。オヤ又てうしのかはりめだオイオイあねえ親方にラウスを大切にして焼餅を一枚あつらへてくんなそして此お客は煮たのがいゝと云ふからタレ拔のスープへみりと醬油をおとしてよく煮てくんなオイ。愚先生飯にやアまだはあの勘平ダゼ。トイとドリ十二の路エエびツくりしたハ、アモウ刻限かしらんゲエ、